

月夜とめがね

小川未明

田代まし時計の音が、カタ、コト、カタ、コト
とたなの上できやんでいる音がするばかりで、あ
たりはしんとしずまつていました。ともじま町の
人通りのたくさんな、にぎやかなちまた巷の方から、
なにか物売りの声や、また、汽車の行く音のよう
な、かすかなどどろきがせりえてくるばかりであ
ります。

おばあさんは、いま自分は「にじ」している
のかすり、思いだせないよつこ、ほんやりとして、

ゆめをみるみたいにまだやかな気持きもちですわっていま

した。

「」のところ、外の匂を「ア」と、「ア」たたかへ音がしました。おばあさんとは、だいぶ遠くなつた耳を、その音のする方にかたむけました。いまじぶん、だれもたずねてくるはずがないからです。れつと「れは、風の音だらつと思つました。風は、」「」て、あてもなく野原や、町を廻るのがあります。すると、「ふどは、すぐ窓の下に、小さな足音がしました。おばあさんは、いつもにこす、それをおもひされました。

「ねばねば、ねばねば。」と、だれかよぶの

あります。

おばあさんは、せじょは、自分の耳のせいではないかと思いました。そして、手を動かすのをやめていました。

「おばあさん、窓を開けてください。」と、また、だれかいました。

おばあさんは、だれが、せじょのだらづと思つて、立つて、窓の戸を開けました。外は、青白い月の光が、あたりをひるまのよつて、明るく照らしているのであります。

まどの下には、背のあまり高くない男が立つて、上をむいていました。男は、黒いねがねをかけて、

ひげがありました。

「私はおまえさんを知らないが、だれですか。」と、おばあさんはいいました。

おばあさんは、見しらない男の顔を見て、「この人はどこか家をまちがえてたずねてきたのではないかと思いました。

「私は、めがね売りです。いろいろなめがねをたくさん持っています。この町へは、はじめてですが、じつにきもち気持のいいきれいな町です。今夜は月がいいから、じつして売つて歩くのです。」と、その男はいました。

おばあさんは、田がかすんで、よく針のねじこ、

糸が通らないで」まつていたやせきでありました
から、

「私の田にあつよつた、よく見えるねがねはありますかい。」と、おばあさんはたずねました。

男は手にぶらさげていた箱のふたをひらきま
した。そして、その中から、おばあさんにむくよ
うなめがねをよつていましたが、やがて、一つの
べつこ「ぶちの大きなめがねを取り出して、これ
を、窓から顔を出したおばあさんの手にわたしま
した。

「これなら、なんでもよく見える」とつけあいで
す。」と、男はいいました。

窓の下の男が立っている足もとの地図には、白や、赤や、青や、いろいろの草花が、月の光をうけてくらずんで咲いて、におつていました。

おばあさんは、「このめがねをかけてみました。

そして、あちらの田ざまし時計の数字や、「よみ暦の字などを読んでみましたが、一字、一字がはつきりとわかるのでした。それは、ちよつと、いく十年前の娘のじぶんには、おしゃべりへ、「こんなになんでも、はつきりと田ざましだのであつたと、おばあさんに思われたほどです。

おばあさんは、大よろこびがありました。

「あ、「れをおくれ。」といつて、やつやく、おば

あさんは、このめがねを買いました。

おばあさんが、お金をわたすと、黒いめがねをかけた、ひげのあるめがね売りの男は、たち去つてしましました。男のすがたが見えなくなつたときには、草花だけが、やはりもとのように、夜の空氣の中ににおつていました。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをもとにしています（一部加工しています）。